

「文化としてのマンション管理（り）」

→ リスクとともに ～ 岡田先生との思い出

尻取りで”り”が回ってきたので、それでは頭は“リスク”しかないねということで書く内容を考えてみましたが、研究紹介ではおもしろくなかろうということで、恩師の岡田光正先生（大阪大学名誉教授）とのエピソードを交えつつ書いてみました。残念なことに岡田先生は今年5月に94歳で永眠されました。皆様ご存じの通り岡田先生は火災や群集などに関する防災の専門家としてご高名で、ご業績等については日本建築学会の機関紙である建築雑誌2022年9月号に追悼文が掲載されていますので参照ください。

さて私は、学部4年生ではFortran言語を使った百貨店を対象とした避難シミュレーションという防災に関するテーマで卒業論文を書き上げました。こうした研究面で岡田先生に怒られた記憶はありませんが、研究室のコンパ会場に防火的にまずそうな場所を選ぶと、“こんなところ火事が起こったら逃げられないで！”と店の選定を怒られたことは覚えています。学生のころは細かいことを言う先生だと思った程度なのですが、防災の研究をいざ自分が一緒になってするようになると街や建築の危なさは身に沁みました。無頓着なのは学生だけでなく建築業界も相変わらずで、岡田先生の防災に関する主張に対して某大手の設計事務所代表からは「防災なんか考えたら設計なんてできないよ」という趣旨の返事をされたらと苦笑交じりで話されていたのを聞いたのも随分昔のことです。

マンションは百貨店と違って低密度の建物で火災に関しては比較的ですが、1995年の「阪神・淡路大震災」の出来事は衝撃的でした。神戸には地震がないという妙なゼロリスク感が市民にあることがわかって、“リスク”をいかに市民に知らせるのか考えさせられました。とはいえ昨今のマンションの自治体による評価に関連して、私も大阪府と豊中市の審議会委員として取りまとめに携わりましたが、そうした“防災に高い意識を持ってほしい”と願う以前の根本的な問題が山積していて、なかなか

か大変だということが改めてわかりました。

また先日、10月29日にソウルで起きた群集事故は本当に痛ましい事故で、若い学生達に聞いてみると同じ年代の若い方が多数お亡くなりになっていることもあり他人事ではないと思っていますようです。岡田先生は事故後のテレビに出演されていた室崎先生と一緒に明石の群集事故調査にもかかわっておられましたし、新聞記事に出ている弥彦神社での群集事故についても、折に触れ“あんななんてことのない空間でも大事故が起きるんやで”と事あることに言及されていたのが思い出されます（こうした群集事故に関心のある方は岡田先生の著書「群集安全工学」を参照ください）。一方、マンションは、そもそも人口密度が過密になるようなことはまずないので群集事故が想定されることはないですが、高層棟では震災時や火災時には避難階段など狭い階段室内での避難になるので避難訓練なども常にされていないと、いざという時に危険かもわかりません。

それからは岡田先生から大学に残ることを勧められて研究者として今に至っています。口の悪い同級生には「お前は社会に出せないで良かったね」と随分な言われ方もしました。同期から見ると相当な変人だったようです（今でもそうかもわかりませんが）。そうした変人をなぜ助手に採用したのかは、とうとう先生に聞かずじまいですが、お墓の中で“横田を残したのは間違いだった”と先生に思われていないことを願うのみです。

（大阪大学教授 横田隆司）



※今回のタイトルは、「て」から始まることばです。